

『Bank Vision[®]』をベースに
安定性・操作性に優れた
新勘定系システムの構築と
次代を担うシステム要員の育成に成功。



株式会社鹿児島銀行様



Case
Study

鹿児島県を中心に地域密着型の金融サービスを展開している鹿児島銀行様。長年にわたって情報システムの自行開発を基本としてきた同行では、次世代勘定システム構築においても日本ユニシスの『Bank Vision®』を採用し、独自開発・自営方式を選択しました。

Bank Vision パッケージの基本機能にさまざまなカスタマイズを加えたアプリケーションを日本ユニシスと共同開発。優れた安定性・操作性を有する新システムを稼働させると同時に、オープン系のスキルをもつ次世代のシステム要員の育成に成功しました。

**鹿児島県の
リーディングバンクとして
地域経済・社会の発展を支える**

1879(明治12)年、第百四十七国立銀行として創業した鹿児島銀行様は「健全経営」「地域貢献」「顧客志向」「企業活力」の企業理念のもと、地域のリーディングバンクとして、鹿児島県を中心とした南九州地域の発展とともに成長を続けてきました。同行が主な営業エリアとする鹿児島県や宮崎県で

は、近年、個人消費・雇用の低迷など厳しい状況が続いていますが、その一方で2011年3月には九州新幹線が全線開業し、新たなビジネスや産業も生まれています。

そのなかで同行は、現在、法人取引先への経営サポート強化や医療・農業・環境といった成長分野の産業支援など、地域密着型の金融サービスに注力。例えば、国内やアジア各国から医療と観光を兼ねた旅行者を集める「メディカルツーリズム構想」の支援、農産物の地産・地消の促進や商品力向上・販路拡大を図る「アグリクラスター構想」の支援、さらには再生エネルギー分野をはじめ

めとする環境関連融資などを積極的に推進しています。

**システムの中核となる
技術ノウハウの蓄積をめざし
アプリケーションの
自行開発方針を貫く**

このように地域に根ざした金融サービスを展開している鹿児島銀行様が、経営戦略の重要なテーマの1つとして取り組んでいるのが、ITの有効活用による業務の生産性向上です。同行では、1973年に稼働した第一次オンラインシステム以降、日本ユニシスをパートナーとして勘定系システムを構築してきましたが、業務アプリケーションに関しては、毎回、自行のエンジニアで独自開発する「開発自営」の方針を貫いてきました。その理由を、システム部 システム開発グループ 主任調査役の福山裕二氏が解説します。

「銀行にとって勘定系システムは、経営に直結する命綱のような存在です。これを長期間安定的に稼働させ、さらに経営戦略や営業現場のニーズに応じて迅速に保守・改善していくためには、業務アプリケーションの開発をベンダ任せにするのではなく、中核となる技術・ノウハウをしっかりと行内に蓄積しておく

株式会社鹿児島銀行

設立	1879年10月6日
資本金	181億3,000万円
本店所在地	鹿児島県鹿児島市金生町6-6
従業員数	2,588名(2011年3月末現在)
事業内容	銀行業

PROFILE



東屋敷 修 氏

業務統括部
業務統括グループ
主任調査役



松山 博幸 氏

システム部
次期システム移行統括室
主任調査役



福山 裕二 氏

システム部
システム開発グループ
主任調査役

ことが重要だと考えています。そこで当行では、システムのインフラを移行してもアプリケーションについては自行が中心となって独自開発するスタイルを貫いてきたのです」

そのため、今回の次期勘定系システムの構築計画においても、フルアウトソーシングを行うのではなく、早い段階からホスティング利用による開発自営方式を決定しました。

「日本ユニシスから最初に『Bank Vision』の提案をいただいた時には、『オープン系のプラットフォームで銀行の勘定系システムを本当に安定稼働させられるのか?』と不安視する声が行内にもありました。その一方で現行システムでは業務アプリケーションの肥大化傾向があり、オープン系システムへの移行によるソフトウェア開発の生産性向上やコストダウン効果などのメリットには大きな魅力を感じていました。その後、百五銀行様のシステムが本稼働して安定的に動いていることが確認でき、不安は解消されました。また、当行では第四次オンラインの構築後、10年近く大規模なシステム開発を行っていませんでしたから、今回、次世代のシステム要件を育成するためにも、『Bank Vision』による勘定系システム構築を決定したのです」(福山氏)

お客様サービスや業務効率の向上を目的にカスタマイズで多くの独自機能を搭載

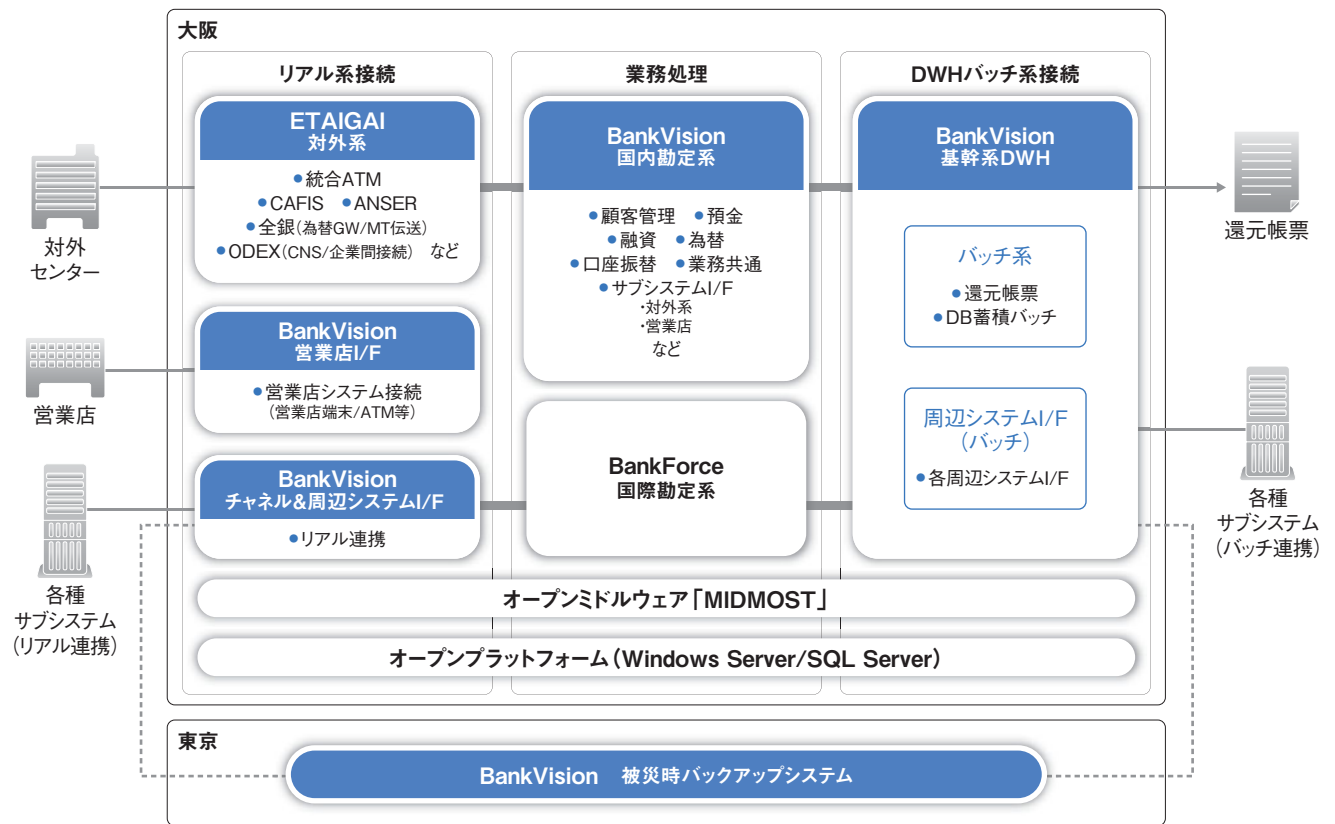
こうして2008年7月頃から同行の次世代勘定系システムの構築プロジェクトが本格的にスタートしました。今回のプロジェクトは、メインフレーム用の業務アプリケーションを独自に開発してきた従来のプロジェクトに対して、オープン系のインフラで稼働するBank Visionのパッケージをベースに必要な機能の追加や変更などのカスタマイズを加えていく開発になりました。

「メインフレームとオープン系システムとでは、OSもプログラム言語も開発ツールもまったく異なるため、開発に参加した当行のエンジニアは、まずこれらの技術を修得する必要がありました。さらに、これまで自行開発がほとんどでしたから、最初の頃は、パッケージソフトとの設計思想の違いに戸惑うことが多かったですね」

こう語るのには、システム部次期システム移行統括室 主任調査役の松山博幸氏です。実際、システムの差異分析作業においても、従来の独自開発システムとBank Visionパッケージとの多くの相違点が明らかになりました。

鹿児島銀行様 Bank Visionシステム全体イメージ図

■ Bank Visionを中核とする基幹系システム



「Bank Visionは、24時間対応をはじめ従来システムにはない多くの優れた機能を備えています。その一方、操作性などが大きく変わるという問題がありました。例えば、入力内容に何かエラーがあった場合、従来システムは誤りがあつた項目の入力欄にカーソルが戻る仕組みだったので、Bank Visionの場合、問題の箇所ではなく必ず最初の入力項目にカーソルが戻るため、オペレータはそこから間違つた項目を探さなければなりません」(松山氏)

こうした差異の多くは、「長年にわたつて改良を重ね、当行の独自開発システムが業界の標準的なアプリケーションに比べて非常にきめ細かくつくり込んであるため」(福山氏)でもありますが、従来システムの操作に慣れ親しんだオペ

レータにとって、極端に操作性が変わると、業務の遅延などによるお客様サービスの低下を招くおそれがあります。

そこで開発プロジェクトチームでは、差異分析作業で浮かびあがつたさまざまな課題について、技術的な難易度やコスト、スケジュール、業務の現場からの要望なども踏まえながら、何をどうカスタマイズしていくべきか繰り返し議論しました。その結果、エラー時のカーソル動作やエラーメッセージの説明など、比較的改造が容易な要件、現場からの要望が強くあつた要件などについては、カスタマイズを実施することを決めました。

「このほかにも、お客様サービスの維持・向上を目的としたカスタマイズを数多く実施することになりました。そのため、当初設定していたカスタマイズ項目の上限をやや上回る結果になりましたが、現場のオペレータにとつても満足いくシステムに仕上がつたと思います」(松山氏)

日本ユニシスとの 共同開発を通じて

次世代の即戦力となる要員を育成

2009年2月から論理設計に着手し、本格的な開発作業がスタートしました。開発作業は、業務や機能ごとに複数のパートに分かれて進められましたが、

同行では、今回のプロジェクトの重要な目的でもある「次世代の要員育成」を図るため、各パートにおいて日本ユニシスと同行とで半分ずつ開発することを基本に人材を配置しました。

「開発に参加したメンバーのなかには入行2年めといった若手も多く、初めての大規模なプロジェクトに戸惑いもあつたと思いますが、日本ユニシスのエンジニアと机を並べ、実際に開発を経験することで、多くの技術ノウハウを吸収することができました。さらに、当行から参加した約60名の要員のうちの13名は、福岡にある日本ユニシスの九州支社へ1年半派遣し、Bank Visionやオープン系システムの技術について詳しく勉強することができました。このプロジェクトを通じて実践的な開発経験を積んだ人材が、今後はBank Visionの保守や新たなシステム開発における大きな即戦力になつてくれるはずです。今回のこうした要員育成への協力について、日本ユニシスに非常に感謝しています」(福山氏)

本番を想定したテストを繰り返し 現場の不安を払拭

多くのカスタマイズを実施したとはいえ、独自開発アプリケーションからBank Visionパッケージへの移行によつ



て、現場の業務オペレーションは多くの変更が必要でした。それだけに、同行では次世代勘定システムへの移行に向けて、2010年5月から、営業店などを対象にした入念な業務トレーニングを実施しました。業務統括部 業務統括グループ 主任調査役の東屋敷修氏が説明します。

「まず各支店や業務部門の事務責任者に対する研修を実施し、インストラクターとして養成しました。そして次に、全行員を対象とした集合研修を開催することも、各支店や部門ごとにインストラクターによる業務トレーニングを実施していき「ました」

ところが業務トレーニングが順調に進み、新たな業務オペレーションに対する行員の理解が高まるにつれて、現場から「本番が不安だ」といった声があがってきたといえます。

「研修では、入金や出金、新規や解約といった業務内容ごとにトレーニングしますから、事前に準備して臨めるのですが、実際の営業店業務においては、どの業務がいつどれだけのボリュームで入ってくるかわかりません。そのため、研修で従来のオペレーションとの違いが明らかになるほど『本番でちゃんと処理できるだろうか?』といった不安が募ったよう

です」(東屋敷氏)

そこで同行では、2010年12月から、土日などの休日を利用した「営業店参加テスト」を合計10回実施しました。これは、朝の営業準備から夕方の勘定上げまで、営業店の1日を想定して、端末操作はもちろん伝票作成、現金のやりとりといった一連の業務を再現するシミュレーションテストです。

「まず主要店舗数店から着手し、その後、参加店舗を増やしていき、10回のうち4回は全店参加でテストを実施しました。その効果は絶大で、実戦に近い条件で新しいオペレーションを経験したことによって、本番を不安視する声はほとんどなくなりました。なお、この営業店参加テストにおいては、山梨中央銀行様から譲り受けたツールを活用して、参加店舗における業務の進捗状況をPC上で効率的に把握することができました。こうした先行導入のさまざまなノウハウを有効活用できるのも、Bank Visionのメリットだと思います」(東屋敷氏)

安定性・保守性と多彩な新機能で システム運用や 営業店の効率化に貢献

また、営業店参加テストと並行して、

5回のシステム移行リハールを経て、2011年5月6日、Bank Visionを活用した鹿児島銀行様の新しい勘定システムが無事稼働しました。以来、現在まで業務に大きく影響するようなトラブルは一切なく、安定稼働が続いています。

「システムリソースの使用状況や処理能力など、いずれも申し分のない性能・安定性を発揮しています。また、当行のエンジニアがオープン系システムの扱い方に慣れてきた効果もあって、何かの問題が発生した場合の対応スピードも、生産性も、従来以上に高まっています」(福山氏)

「Bank Visionは、従来システムにはなかった24時間営業をサポートしているの、今後、ニーズがあれば、ATMの営業時間延長などについても対応できるようにになりました」(松山氏)

さらに、営業店業務においてもさまざまな導入効果が発揮されつつあります。「何といても営業終了後の勘定照合の確度とスピードが高まったのが大きなメリットです。これまでは、1日の取り引きで発生した出入金を支店単位で照合していたので、もし勘定が合わない場合、その原因を突き止めるのに多くの時間と労力を要しました。これ

KAGOSHIMA BANK


 かごしまー直線
2011年3月九州新幹線全線開業

まっすぐに、ずーっと。

南の風さわやかに



鹿児島銀行

わたしは、あなたの“かざん”です。～笑顔のために、笑顔でお手伝い～

南大隅町 佐多街道から

に対してBankVisionのシステムは1件1件の取り引きごと、あるいは端末ごとに入入金照合するので、勘定が合わない状況は基本的に起こらない仕組みになっています。その結果、すべての店舗で勘定照合に要する時間が大幅に短縮されました」（東屋敷氏）

開発生産性向上や コストダウンに寄与する ソリューション提案に期待

同行では2012年3月の年次決算や支店の開設・統廃合などに無事対応するまでは、新システムの安定化に全力を傾注する予定ですが、その一方で、将来を見据えた新たな開発プロジェクトの準備を着々と進めています。

「この数年、人材リソースのほとんどをBankVisionの開発に投入してきたこともあって、現在、金融制度改正への対応や新商品・新サービスへの対応など、新たな開発案件が山積みの状態です。ただし、開発生産性に優れたオープン系のプラットフォームに移行したことに加え、今回のプロジェクトを通じて即戦力となる多くの人材を養成できましたので、今後はさらに効率的に開発を推進していきます」と期待しています（福山氏）

て、今回、情報系システムについても同じオープン系のインフラであるBankVisionの基幹系DWHに移植しました。プラットフォームの統一によって、開発手法が共通化され、オープン系システムに強い開発要員も揃いつつあります。今後、この新しい開発体制を活かして、当行の経営革新につながるシステムをより迅速かつ低コストで開発していきたいと考えています。日本ユニシスには、これからも戦略パートナーとして開発生産性の向上やシステムのトータルコスト削減につながる魅力的なソリューションを提案していただければと思っています」（松山氏）



継続的なお客様満足の実現のために これからも価値ある提案をめざします。

独自開発方式で進められた今回の新勘定系システム構築プロジェクトでは、『BankVision®』の標準的な機能やインターフェースに対してカスタマイズが施されました。大規模な開発作業を進めていく間には、いろいろな課題が発生しました。鹿児島銀行様と調整しなければならないこと、当社の改善によって解決すべきことなどさまざまな事案がありましたが、いずれの場合も、営業担当としてお客様の声を確実に社内に伝えるとともに、当社のリソースを最大限に活用して課題を解決するよう心がけました。

システム導入は完了しましたが、今回のプロジェクトの大きな目的でもある“ソフトウェアの開発生産性の向上”や“トータルコストの削減”といったお客様のご要望に応え続けていくためには、今後の提案活動が重要になると

感じています。3年後、5年後も「BankVisionを採用して正解だった」「日本ユニシスをパートナーに選んで良かった」と感じていただけるよう、勘定系システムの安定稼働を実現するのはもちろん、コスト削減や地域活性化のアイデアなど、お客様の経営戦略の推進に寄与する価値ある提案をめざします。



今野 勇

金融第三事業部 営業一部
鹿児島グループ 営業所長